



日蓮上人一代圖會

伍

波13
594
5





日蓮上人一代圖會卷之五

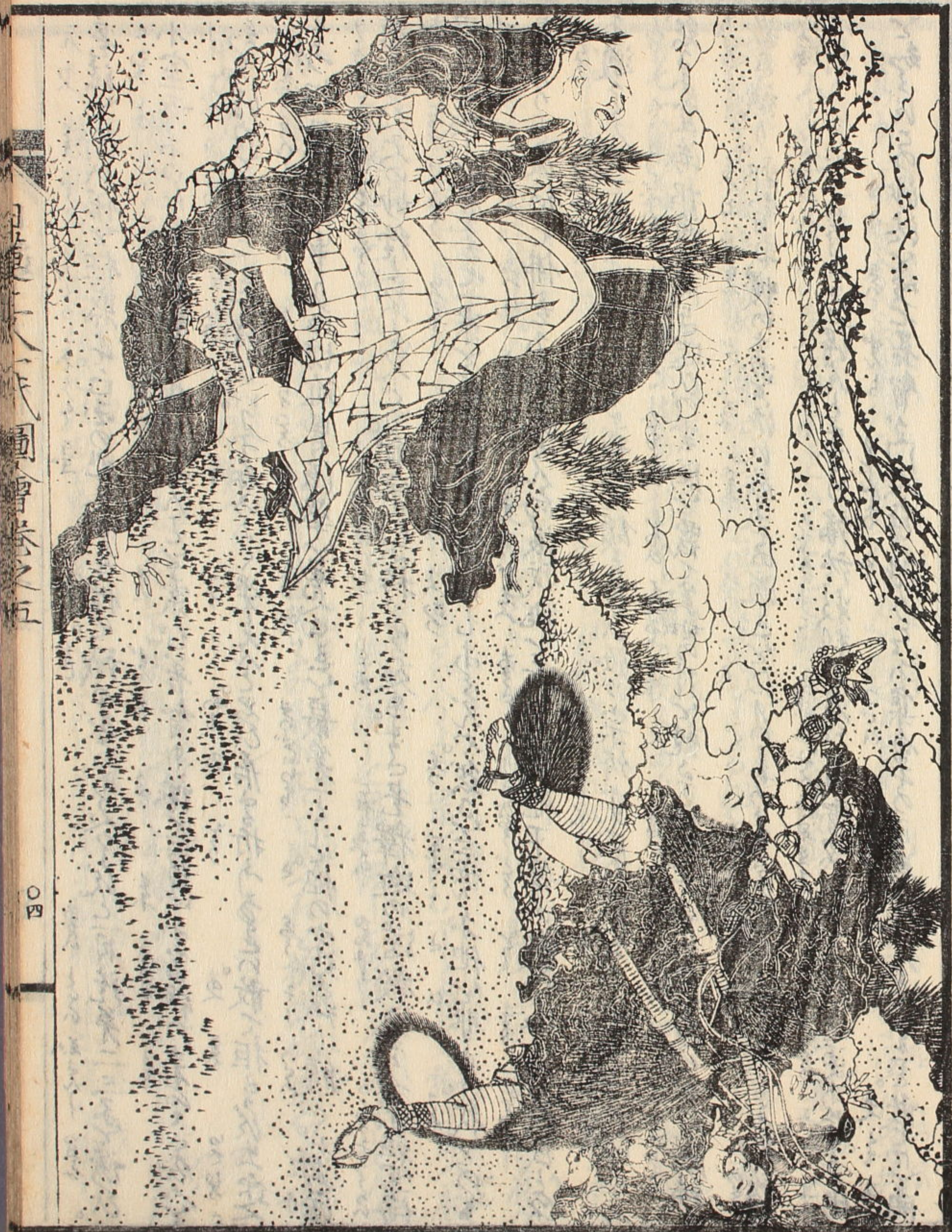
第二十八 時宗宗牒高祖賜入共高祖身延入事

再說副元帥北條時宗高祖が念乳の凜然たる威を心中酷感しけれど今や禪喜
 言の流るるに念佛の淨土宗國中不設扈てこそとせんとするも路なく法を棄てん
 とする時かの意の怒を生むれとのむらんことを恐る然れども高祖の法を實小法上の法
 あるを曉り有司と縁して一通の宗牒を示さるその畧小い頃年較多真法の威力小
 於て淨威を流るるに實小三不不比類る妙宗後代有難。是信何れの宗う之小比
 甘ん日本國中不於て宗弘の候更不妨あるは仍執達する者とて戴る近は持
 志んま祖の許不違らるる祖恭まことを拜し謝を後小宣ふを。嗟我化の及を
 ざると實小まるといふこと。如何とあるまば天下小君とる人の法とてとるものぞ
 憚る処あるまことと母のむとる宗牒を徹しあり。こま我小阿修之末法の弊と不ある





高祖たかそのか小室こむろの
善智ぜんちの
法棚ほつだうの
人ひと



ありて法力を較ぶ巨細を裁き、その信小信大なる傍小巨石あり。若智最多用
 金珠と探で祈る小忽地殺ありて、得の巨石宙界の觀る者も變逆小多の祖
 微笑ありて是れありて邪術を以て衆惑惑ひて所之我念とて巨石と信小頭の上小
 墜さん信よく持念とて石の信小打る。といひも畢らば鬼一も亦かの大磐石動き出て若
 智が頭上小墜んといひ若智は子孫救おぼせ。とて除んとも小能は以て因て祖罪
 と附以巨石赤で若智と除り。故小若智その術之小及ぶとざるも衆一。高祖小
 從ふといひ信小。後小若智の弟子とあり。日傳の若智場ひ肥方阿闍梨と唱ふ。德
 栄山妙法寺とあり。今か寺より清毒の若智と云ひ。おふこの因小據り
 かとてとより百歩を距て。もこの教石小倚り。塵と振て說法。も人聴衆多く集會する内
 炎天小人農家の男女下りて水田の中小在り。蛭子と拾ひてとて殺す。とて祖とてとを以て
 ありて衆罪の中小かけ。殺生とて重く。微物とてども殺す。と勿れ。殺すとてかつとて
 滅ゆる人。農民とて小對ていさ。吾儕妄小殺す。小あひ人の此小著て生血と吸ふ。故小との

害と云ふの。故小幸の彼小在り。何とてと。悻らんとて祖領を失ひて宜ふ。然らば我加持と
 志。蛭子と人の此小近行あり。と皆く喝頭護念あり。とてとより殺すの蛭ありといふ。と
 人小著とあり。依らとて去り。東郡小住あり。天陰り霧深く。傾て雨らんとす。伊佐和今和
 小あつて宿と求む。禪の至き祖と悟と。宿と假一。事と世に。祖患ふる。宿もあひ
 二。三。ふと願とて。時向てあり。一。玉。一。郡の内とて下り。人の心推とあり。若し時小外小。とこれ
 より。測りぬ。小忽然とて。茅庵あり。その中と觀入る。小改小然の香と。後之。額小南子の波と
 後。八十。餘りの老翁とあり。月朗照て。宿とを。諸小翁。飲ひて。三個と傳。我の年。未終と養
 ひ。願と。源と。とて。業と。一切の罪業。推とあり。とて。殺生。最深。毒と。あり。とて。生。ある。の。宿
 業。小。同て。今。先。量。の。昔。報。と。受。ふ。師。と。ま。ま。あ。ま。と。謂。て。阿。訖。す。と。ん。え。さ。う。が。勿。地。の。長
 一。丈。ま。う。の。鬼。形。と。あり。と。は。より。の。眼。毒。の。痛。と。吐。出。し。心。神。惱。亂。し。て。虛。空。と。睥。む。その。容。の。怖。し
 め。と。語。り。て。の。ひ。さ。す。祖。と。と。看。む。ひ。て。更。不。離。く。乳。之。の。坐。は。時。小。鬼。形。忽。地。消。へ。一字。の
 茅。庵。と。ん。り。も。烏。有。と。あり。と。人。と。て。人。以。達。刈。萱。深。く。茂。ま。暎。被。小。也。露。盤。く。風。冷。さ。小



石和の鶴飼
得度の圖

と不池上宗仲の大家と那が志と美め宅と捨ん寺とまひそのよふ寂心身自證の使と
たえり祖小ととを名なり。為ふその勝と信ふ祖ととと感下ゆひ長栄山本門寺と号り
曼荼羅を圖を共へり。宗仲大を在ひて。辯因梨と拵くとるも。辯因梨とと青の宅
唯小宗祖の命と續つる祖日朗とと長興山妙本寺長栄山本門寺の友寺と區せり
の宗仲別小地と割て辯因梨と拵りけし。日朗まの領を法弟大進とまてとと小
居とめ。その身は牙と枕と。深く熱と世を現いと。守文印探他小異る。

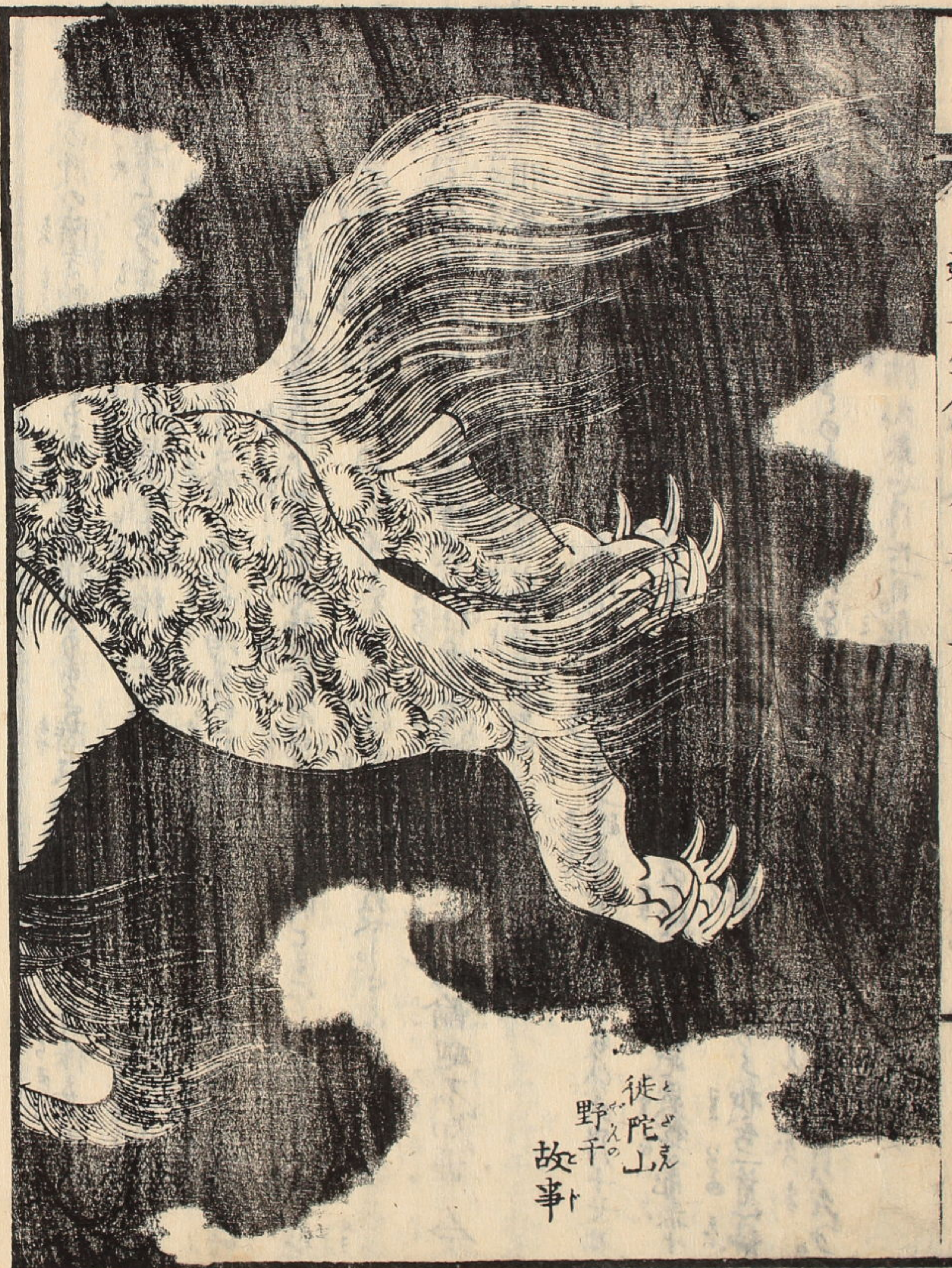
第三十一 經一磨日朗小従ふ其身延山の記の事

建治元年乙亥三月五十四日。春紫羅威使杜世忠朝鮮使冠と若て奉る。利
兵衛と空しく帰ると。と下総の國平賀氏平忠勝との人あり。男の二人と若て見と
壽麻呂とのひ身と龜と麻呂との一時忠勝弟壽麻呂と。比企の文室小伴ひて日朗小拵
ける日朗熟ととと之と大の強と奇るとして。我師出世とて法と四海小拵と東州小
多く縁ありとると。未その化帝教小及と。我平生小ととと嘆く。今幸小此法置

得る他日大振らん者との思ふとと喜と。忠勝ゆも。悦ぶ日朗乃こまを拵る。是
能延ふ小とと祖小ととと。祖ととと。實小日朗が目ととと。是ととと。我
弟ととと。我法ととと。表ととと。大小在ひととと。一麻呂ととと。更ととと。干時年
南ととと。常小ととと。祖小侍ととと。修りて十に歳ととと。祖の権小ととと。日朗これととと。菴
發深衣ととと。果して二十家のま。帝都小宗門ととと。兩く妙顯との兩心ととと。七日像ととと。と
是ありま。下総小曾谷丹波入道教佐の曾谷山城入道道崇が父也。食邑城中の國
不在り。ま。太田氏禪門。ゆくと祖小飯依。奉を嫡子。太舟ととと。祖小投ひ。これ中穿
二代日高ととと。是あり。老後太田氏架沙教と著。佑名ととと。道野ととと。祖常は業の
上人と呼ぶ。禪門実名と兼州ととと。その先。源三位頼政ととと。かて八月。自受法樂
の形。能延山の記と造り。文章然ると長くととと。て。小掲げ出はととと。ととと。多く
見奉の耳。通下雜ととと。然れども。我せん。ととと。の。繁雜之故。漢文。我國家小
和らげ。竊小已。眩解ととと。ととと。識者の質。小由ととと。ととと。曰く。此死の地。ととと。靈

なるる異るるる。清淨寂莫。天人降下。海神衛護。百未食。未由是。不於之。廉
 小婦。由馬。不於之際。時。是。秋。風。廬。願。露。標。珠。の。糸。の。掛。不。掛。て。珠。と。貴。き。玉
 と。連。ね。紅。葉。露。不。降。て。の。見。の。水。影。と。懸。然。因。の。神。と。思。入。と。あり。威。く。る。言。山。後。不
 あり。湯。と。る。長。川。ち。あり。禪。海。標。叶。び。て。樹。の。一。葉。妙。法。の。果。と。結。び。水。の。入。実。相。若
 如。の。月。と。浮。む。雲。明。の。園。晴。の。法。性。の。空。清。凡。夫。不。測。の。聖。境。也。覺。者。棲。神。の。妙。土。之
 山。僧。草。の。地。と。得。僅。一。の。草。と。辨。む。終。日。妙。典。と。結。終。竟。夜。要。文。と。誦。持。し。て。り。て
 毎。坐。盤。の。佳。念。小。滅。せ。び。務。と。け。凡。小。淨。性。と。確。と。露。不。沾。り。不。粘。と。不。粘。不。捨
 芥。と。齒。の。溪。小。掃。む。も。菜。と。灌。ひ。袖。と。曝。く。人。凡。分。祿。と。信。以。吟。賞。し。て。已。ら。の。樂。の
 う。も。只。熟。釋。言。因。修。永。法。の。芳。端。と。業。む。る。不。始。相。似。る。と。あり。何。と。も。ま。の。樂。法。梵
 志。と。る。う。ば。皮。と。剥。て。紙。と。り。髓。と。取。て。水。と。り。肉。と。割。て。骨。と。り。骨。と。折。て。筆。と。り。
 下。方。迦。葉。佛。の。偈。と。書。び。り。所。謂。如。法。不。修。り。ま。く。非。法。と。行。む。今。世。及。以。後
 世。也。法。と。り。ま。く。安。穩。之。薩。埵。と。り。ま。く。の。罪。と。勝。る。虎。不。共。雲。山。の。有。ま。と。り。

ま。の。身。と。と。半。偈。不。供。ト。尸。毘。と。る。ま。の。能。と。智。子。不。秤。子。或。の。眼。耳。と。乞。者。不。授
 く。ま。の。大。の。重。と。る。ま。の。常。の。殺。鬼。と。信。輪。廻。の。困。厄。と。觀。ん。位。と。捨。改。戒。委。ね
 大。法。の。嚙。と。吹。き。大。法。の。教。と。撃。ち。と。法。と。は。方。不。求。め。七。珍。美。宝。を。供。養。象。馬。妻。子
 と。布。施。時。不。阿。私。心。ある。者。あり。告。て。い。く。若。我。不。違。い。ま。の。ま。不。為。不。宣。說。と。應。し。と。
 王。大。小。歡。喜。し。て。菓。と。持。り。水。と。汲。り。お。と。拾。ひ。食。と。汲。り。手。載。給。仕。し。て。情。不。妙。法。と。存。す。が
 故。不。應。心。懈。り。倦。と。る。その。習。ふ。所。の。法。の。即。妙。法。蓮。華。經。の。み。字。を。我。躬。古。未。の。文。義
 と。執。て。五。七。五。七。七。の。句。不。綴。り。如。法。經。の。伽。陀。と。る。及。支。佛。法。の。師。不。奉。と。る。先。と。子。古。德。の
 い。と。く。若。我。子。あ。て。師。の。過。と。ん。ま。の。若。く。の。実。不。由。若。く。の。不。實。不。由。其。心。自。ら。増。ま。は。法。の
 勝。利。と。失。い。ん。又。い。く。香。城。不。骨。と。移。不。雪。嶺。不。能。と。投。む。も。亦。何。を。德。と。報。う。不。足。らん
 如。未。慙。歎。ふ。の。法。と。秘。嘆。ふ。の。因。者。觀。喜。せ。る。か。常。啼。の。東。不。法。ひ。善。財。の。南。不。求。め
 菜。王。の。臂。を。燒。き。普。明。の。首。を。刎。り。る。一。月。不。二。恒。河。沙。の。鹿。と。捨。ると。尚。一。句。の。德。不。報
 が。況。や。兩。肩。不。若。と。負。ひ。て。百。千。劫。の。世。と。經。ると。佛。法。の。恩。と。報。む。る。不。足。らん。昔。者。毗



徒陀山
野干の
故事



其の同書小にまよひたる文永十一年の條小五月十二日鎌倉を登り、此處へ赴き入道
 甲州南郡小宿寺小宿一の寺主大輪改宗受戒して日壽と号するの意せしむの流
 あり。其祖山を流せしむ。此方を花をさるへふむす水の流れのひきまらたれば
 此法のえりあつらん。世は櫻の木の花杖つせられし杖とす。所小口をされし根つた
 支よりけ所を根法あるとす。統記小のちのこをえん。統記の圖小馬ふりひの蓋
 この款知らしむ。根法あるとす。はの向ふの此法といふ法のこと。まよひ妙法のこと
 あり。まよひ法の流はたのこをえん。たのこへの假字を用ひたるぬ。此法とこそあら
 まよひえりあつらん。何れも此の款。假字の傳る所。その出所定するは祖の傳
 とつひの言ふ本あり。

其の三、日蓮靈山會上とて相承せし一太り。肉坐の胸中秘あり。

是を以て胸中の法傳入定の處古きと轉法輪の處候と誕生此處に中ひき
 處後代不思議の法華經の行者。是地不穩坐して幸々靈山淨土小あり。法妙
 あり。故小人貴し。人貴き故小處變り。其是とて謂れ。其四、日蓮の針のそ未
 來降。此處山不留守。初め惡業と未め。門人處とてとて折く。我を不應せしむ。

所有て到る。風世因縁あり。其五、又各家の相承とて。靈山の三世法傳法の傳處
 死骨安坐の靈地あり。今此處山の祖祝法の傳處。金骨安坐の傳處。其六、又高祖
 在世と按る。靈山の變の法門。若くは破き若くはまよひの山あり。録し出ま。其七、按
 はる。祖の應せり。生處の小湊。得道の法流。轉法輪の此處。入涅槃の池上あり。田比
 企谷の系何。いそく依波。以あり。故小とて取。其八、高祖弘化の地。小湊松葉谷
 以企中山。池上あり。とて。遺文の中。惟此處と筆をて。その跡と筆。其九、まよ
 法正流布と以て。まよひとて。月氏の靈山の在世八年のこと。今此處山の末法。其十、

按る不紀年報小報因鈔のてを載すその書の大要の妙なるはるるは法
小ありと記。以て自師恩を報するの根蒂とす。その云わく五た慈悲深
大なる宗小の年の後小速とんとす。

日書不のこの年四月十六日。蒙古の侵長別宮の津小到ると云。十六日書と作りて
兵衛某小異へる。後てその兄宗仲小志ありて宗仲が父權宗小執するは法。父
怒とてとて逐ふ兵衛兄と志と曰く故小法及とのと載す。本文龜王麻呂が兄小
語小所あり。然れども後死あり兵衛某のこのとをいへ。ま書と異へるともいへん
月書小のそく各谷は多ある。梵宇と然別野呂小化り。そ祖と法と國と
供養甘んとして祖膝とあるとありて。門人日合と名して國をせしむとあるとあり日合の
まは權者ありん。まその名とてその時宗仲の妙法一本と書てあり
あつと云

かそそ祖の化丈小あり。其もとて忘後以て後世のよくとひも。まその慈悲深
たして學徒の務れとて實。門小山梨郡胎養寺の主月法とて分とあり。まつてそ祖と
拜し徒才とあり。そ祖とまを容て宗と改め名と揚ふ。三寺第二代の自乘とてあり。まそ後
州名の宮史右の僧空存法所とあり。そ祖と拜偈七師賢の契と結ぶ。先長寺第二代月
春とてあり。故小一宗一寺の任職と。徳と慕ひ化と直して忽地小在富宗と捨る。況と俗の
男女小捨て。宗と改む者日小多し。月年七月十六日は條の續委釋迦のそ傳一龜と
造りて取暇とてふ。祖その志と美し。田光の書と併せてとて。揚ふ頼其大不承とてとす
池上右衛門大受宗仲。遙と庇延と訪ひ。言祖及び法ふ。偈一慰め。同て洋南教日あり。そ
小山中小あり。其の祖と始り。法才從僕日小不食。ま折とて。小その鹿食いとん。まの
と粗く糞と糞と。まよくまら。菜のと料と。如てか。の藝藝の。ま不劣れり。宗仲心中。小深く
感下。躬澤小下。ま水と汲。漢小も。ま折と捨。山小入。ま射と捨。以て人の旁小代り。數日小
去て辭。如て。ま書と不謂てあり。日と造。回と祖と訪ひ。小所。法の。為小能と忘れ。糞。飯。其
竹と流。小由。速と。吾。俗と。ま才。極あり。ま。煖小衣。甘く食あり。ま。喜。托の。及小あり。ま。汝

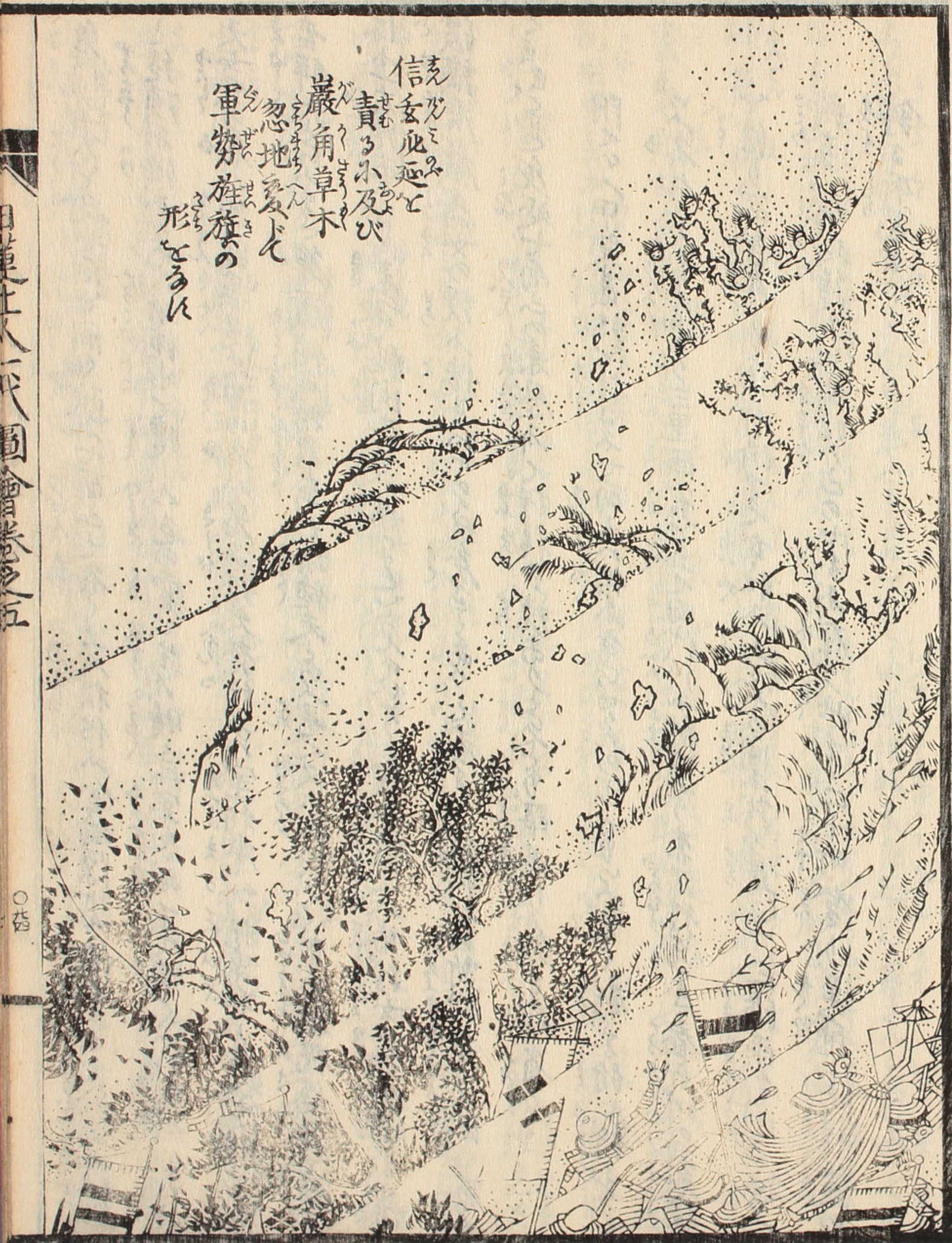
述の謂忽地不氷解を胸中の迷雲と披き美如の月と観んと必せりか之の年二月に
 條金宿妻釋迦の太子傳と違ひ祖小孫眼とけし祖書と違ひ祖志と違ひ
 四月不氷曾宿教修此延不來りて安否と問ひ答く不淨焉とて説法於座
 因一學業今の稍不進と云ふ信力を得て深理を曉り家と為の云あり因之その家
 誦と播男あり教典を授け其言祖の多と旁一の藉筆あり字は法蓮名と月札と秘法
 今不四條頼基の二子に善信の本依と違ひと云ふ此眼と云祖不も不後不此延の播湯
 坊の中をさる今不安垂に頼基甲の内船村不食む飯と捨て寺とす今不此延の
 内船寺是之の身中務及び妻子と捨て屢來り法と體と成と云の教と灌と被是
 補ひ之を祖と云此法の法門と云ふ人の性め年を祖大厄不遭て雨井の海濱於の只
 史とあり人とは是未のて此不の守備と云ふ祖大厄不遭らる各を自ら裁定下と説不
 刀の欄と捨りその動靜と疾く不を祖の心志と云ふと云ふ相之感涙と云祖
 へ依波不遷と云ふ此の心と獄不上下と云ふ因縁信力と云ふ祖の心と云ふ志と云ふ

四條もよ深く追慕して時を祖念ひて死説法とありは其の秘衆雲の如く取捨と破
 因に當り四條は婦及びその令娘も今不あり然る不子の宿龍乾獨嚴者て衆人本相
 三つと云ふ諭る不群鷄の中不仙鶴の在る人最と云ふと説て今不不書と云ふ
 ありありその辨想と因志と云ふと説り凡ありと云ふと説けるは六に條大不存不のり
 祖のまこと其の思と云ふ以画と末神力の要向と事あり今不不内船寺の於物ありと
 ひと不此延不下の邑を在摩耶光基の念伴の心と傾け平泉寺と攝(環)陀と安曇一帰
 依の傍周幡房と云ふ日夜阿彌陀佛と説誦せむ然る不周幡幡房より津去宗の僧と
 まじり少く智解ありと云ふ密の密の祖が徳容と兼ひ且説法と云ふ不此延の勿地説
 其の思ひの在阿彌陀佛と説と云ふ祖の歸依は法華經の要文の自我獨尊と普門品を
 と候補行業法者不異ありと云ふ光基を名不當と云ふはすて周幡房と説周幡房と云ふ
 對我奉末徳と云ふ即此法華の法華を願志と遷遠の阿彌陀佛と云ふ今此の非と云ふ
 改む不ありと云ふと改め妙法不ありと云ふ祖の徳を説と云ふ祖願と云ふと説と云ふ

佛殿門西桑谷。日夜說法。雖披露有不審人可問答。鎌倉中上下貴釋尊再出世歟。故無及。一問答人。然建治三年六月九日。聖人御弟子三位公日真為問答。至彼先雖舉重重難勢。龍象乘心閉口。爰畫馬侍四條頼基侍問答。座其後頼基於其座。惡口龍象之由。有訟畫馬越後入道大嗔龍象房與極樂寺長老諸人如釋迦彌陀仰處。惡口之条奇怪也。勘氣矣。其後頼基不可信法華經之由。書起請文。可歸參之由。有狀焉。弘安元年四月五日。頼基返狀云。頼基惜所領恐頭書。起請候程者。君忽可成法華經敵例。依良觀。讒訴釋迦佛御使日蓮聖人奉配流聖人御勘氣時。如申百日内。自界叛逆。共打出未。若于武士亡是。偏不良觀。奉失候乎。今又付龍象良觀。小乘法頼基。令書起請者。君又可當其罪矣。と云えり。是より蒙古藝末の記あり。今とまを略次

再說此處。不法輪石と云るあり。今此石菴を造りてとまを守るとぞ。這の月所の路間あり。

所の二巨石あり。性昔より祖を不傍て。強法より衆石伍と云。奇狀怪状あり。つらつら頭の勢あり。と云ん。不説法の時。一婦人來りて奉仕給供。其の年二十可。不て空糞を糞あり。この時檀越波本井氏也。妻りてこの座あり。ける。是と云て。大不怪。何方より来る。これいふ。是郎の處女。不あり。いと。妻感感。せ。処を祖への婦人と。初る。周くとまを願て。いと。女。勢藤。藤嚴。おへ。衆人と。列坐。人。まご。まご。と。教。人。今。本。形。と。現。す。下。と。婦。人。と。ま。不。受。ん。いと。く。一。滴。の。水。と。得。ば。その。命。不。死。ふ。べ。と。言。祖。侍。者。と。一。華。瓶。と。執。り。と。ま。と。婦。人。の。お。不。罪。下。む。婦。人。この。瓶。の。あ。と。承。り。と。齊。一。忽。地。長。さ。二。丈。餘。の。毒。蛇。と。あ。り。華。瓶。と。纏。ひ。首。と。奉。げ。手。と。吐。て。怖。い。さい。え。ん。方。有。波。本。井。氏。も。驚。く。と。の。念。心。忽。地。水。解。る。故。あ。る。と。云。お。思。ふ。も。祖。堂。と。畫。者。と。云。え。その。真。教。と。因。せ。り。婦。人。更。不。形。と。復。一。吾。所。親。塔。中。の。別。付。と。受。て。末。法。の。導。師。と。有。ま。ま。も。と。併。牧。と。蒙。り。護。法。神。と。有。る。長。く。此。と。云。え。水。火。兵。華。の。疑。あ。る。と。有。る。と。む。若。衆。生。あ。つ。て。一。乘。と。信。受。り。云。上。菩。提。不。回。向。さ。る。と。有。る。と。云。え。その。所。教。如。空。若。祥。と。得。せ。り。ん。と。社。を。以。畢。ん。と。云。え。その。聖。迹。の。地。此。處。の。西。春。氣。川。の。上。不。あり。心。最。高。と。云。え。



〇五



とのおふり。日明名地谷とゆふ。かそ鹿延四代の主日願長興長栄の二山小比七長谷と
改めり。朝門の三長と申と入所明長興山妙中寺長栄山小門寺長谷山小門寺
あり。曾てこの國遠光寺の禪宗小の榮西の徒あり。當住と宗明といふまじ向の長遠寺
言ふん處住と天心法印といひ多。言祖が化小極て風長重發。日か定とて大坑のわ。鹿延
事り宗と改め住才といふと傳と宗明と日宗と大天心と日公と申方より各月日異みれ。懸
は故小保世能たかて鹿延の丈室の未より細本と以て編と且昇遷の所あり。今今年堂の乃小
壓且坐對玄小任世世とて祖檀越と事と不君びと。門弟子小保とて孫ふ干時後以
上野の邑主伴と差して寒と阿以直辛二結と傳りけり。言祖をびひとを謝あり。そのまおひ
住ぬる冬永十年六月十七日。その宗入り本と成て誓と結ふ。今里表は年と終に柱根腐れ
破と月日漏り風の透る故不燭とて終と照。春に之抽收る。は後今保ち敷けをまより
僕徒多。住才小保と修理せんといふる根小ま。くをを堂と喰ひら。内上野の邑を辛二結
と寄む。その一法は美秀珠の着。謝とといふ。その山書波本井家不傳る。処今鹿延の什物と

たのま

第三十四 阿佛房三三身延之記 其大無香像と常忍不與の事

あまの弘安元年戊寅三月五十七あるませり。その年後乃岩中実相寺の法改智海法
印天有宗と棄此延不此て法從とて祖剃度の式と設け。衣と更て名と日源と賜ふ。ま七
月二十八日。佐州の阿佛房来る。その内九十九歳いと稀なる高年とて。鹿辨持健あり。言祖文
小後とてその杜健と表ひ。人時小阿佛房復と阿と。聖妙衣と出と。謂ていく。言子精小老
ろゆいんせ。願くは所の手と旁。剃度の式と用へ。比丘の教小入んとい。まを併り。あ
か懐あり。故小加教法と衣。應後小著さんと思ふ。師とて。嫌と多と。言祖は。大威。速小
その望小免ぬ。呼七日得上人といふ。まその妻千日尼より。言祖小単衣と袈を。言祖書と造
ま。其入へ。いそ。日蓮とん。秋止。日月と拜定。影と文中不接と。再會。聖徳。心
且阿佛房文永甲辰より。今年戊寅。あるま。未過と。び。及ぶ千里の山海。重の險。祖
其志大海より。汝く地より。厚。何と。心と。小報せん。妙徑。阿結。共小十卷。布の。梵多。罪



高祖鬼火

〇六

身延山
大室岡



高祖鬼火
見ゆ

日蓮上人一伴圖會卷之五

